

# 思婦の詩と月と

山口爲廣

一

今夜鄜州月 今夜鄜州の月

閨中只独看 閨中只だ独り看ん

遙憐小兒女 遙かに憐れむ小兒女の

未解憶長安 未だ長安を憶ふを解せざるを

香霧雲鬢湿 香霧雲鬢湿ひ

清輝玉臂寒 清輝玉臂寒からん

何時倚虛幌 何れの時か虚幌に倚り

双照淚痕乾 双び照らされて淚痕乾かん

杜甫の「月夜」の詩。至徳元年（七五六）秋、長安で安

祿山の賊中に在った杜甫が、疎開先鄜州に在る妻を思つての作である。ここで杜甫は、月に対して、この月を見つつ

夫である自分を思っているであろう妻を慕い思う。

宋の葛立方は、『韻語陽秋』巻十に於て、劉宋の謝莊に

「千里を隔てて明月を共にす」の句のある如く、人は互い

に所を異にするも、眺める月は同じである。従つて、戦乱により妻と隔てられた杜甫が、月を見て妻を思ふは人情の自然であり、杜甫が「月夜」「一百五日夜対月」「江月」の詩に、月を見て妻を思ふも謝莊の意に同じであろう、と言う。

「一百五日夜対月」「江月」の二篇、「月夜」の詩と共に、月を見て妻を思い、妻もまた同じその月を見て、夫である自分を思っているであろうと想像する。この点発想を同じくし、葛立方の言の如くである。

杜詩には、これらと同じく、言わば「月を共にする」（以下便宜上「月を共にする」、或は「共にする月」を以て示す。）との発想を示すものとして次の二篇がある。

月夜憶舍弟

戍鼓断人行 戍鼓人行断え

边秋一雁声 边秋一雁の声

露從今夜白 露は今夜より白く

月は故郷明 月は是れ故郷の明

〈略〉

月円

孤月当楼滿 孤月楼に当りて滿ち

寒江動夜扉 寒江夜扉に動く

〈略〉

故園松桂発 故園松桂発き

万里共清輝 万里清輝を共にせん

いづれも、「月を共にする」の相手は故郷であり、さきの「月夜」等の詩に於けるそれが妻であるのに異なるが、

「月を共にする」の発想をとることに於て相同的。尚、「月夜憶舍弟」の「月は故郷明」について、仇兆鰲は、「故郷の明とは、猶ほ是れ故郷の月色のごときなり。」（『杜詩詳註』卷七）と注するが、鈴木虎雄氏は、「仇氏は月明の色故郷のごとしとく、鄙見は『故郷にも亦明なるならん』の義、光を共にするの意なるべしとおもふ。」（『杜少陵詩集』中卷〈統国訳漢文大成〉）と説かれた。妥当な解であらう。

ところで、月に対して人を思うの詩、或はかかる表現を有する詩の例は、早く漢代に見えるものの如く、そして六朝期に至ると、その例まさに枚挙に暇無しを観を呈する。

然るに、例えば『先秦漢魏晉南北朝詩』（逯欽立纂輯、中華書局刊）に拠って覽るに、うち、所謂「月を共にする」の発想に従うもので、管見に入つたもの十首を越えず、その例、寧ろ稀少と言ふべきである。今、うち四例を挙げておこう。

明月照高樓 明月高樓を照らす

含君千里光 君を含む千里の光

巷中情思滿 巷中情思滿ち

断絶孤妾腸 断絶す孤妾の腸はらわた

〈略〉

（宋湯惠休「怨詩行」△『樂府詩集』卷十一）

始見西南樓 始めに西南の樓に見え

纖纖如玉鈎 纖纖として玉鈎の如し

〈略〉

三五二八時 三五二八の時

千里与君同 千里君と同一にす

〈略〉

（宋鮑照「甌月城西門解中詩」△『文選』卷三十）

秋月出中天 秋月中天に出で

遠近無偏異 遠近偏異無し

共照一光輝 共に照らす一光輝

各懷離別思 各々懷く離別の思ひ

(梁武帝「迎戍詩」《玉台新詠集》卷十)

秋風兩鄉怨 秋風兩鄉の怨み

秋月千里分 秋月千里に分かる

寒枝寧共採 寒枝寧んぞ共に採らん

霜猿行獨聞 霜猿行々独り聞かん

(梁范雲「送沈記室夜別詩」第三、六句《詩紀》卷

七十七)

かかる発想に従う例の乏しさは、続く唐代に至っても尚不変と言うべく、かかる傾向は、特に、月に対して夫を思ひ、所謂「思婦」の詩に於ける「思婦」と「月」との関係を探る上で先ず注意すべきことである。

詩、特に六朝詩に於て顯著に見られる「思婦」の詩。婦の月に対して、夫を思ふ詩は、その中でまた大きな比重を占め、用例も豊富である。その「思婦」と「月」とを結びつけるもの、或る場合には、既述の如き「月を共にする」の発想も考えられよう。しかし、その用例の乏しさと、「思婦」と「月」との緊密な関係とを合わせ考えれば、それは決して本質的なものではなく、他により本質的、普遍的要因の存在が予想されるのである。

ところで、謝莊の「月賦」(『文選』卷十三)は、親交厚

き広場・劉楨の死に落胆せる魏曹植に、王粲がその命に応じて文章を献上したとの設定になっているが、その終りに次の歌が見える。

美人邁兮音塵闕 美人邁きて音塵<sup>た</sup>闕え

隔千里兮共明月 千里を隔てて明月を共にす

臨風歎兮將焉歇 風に臨みて歎くこと將た焉んぞ歇<sup>や</sup>ま

ん

川路長兮不可越 川路長くして越ゆ可からず

劉宋の顏延之が、孝武帝に答えて「莊始めて千里を隔てて明月を共にするを知る。」と説いたという(葛立方、前掲書)のはこの歌のことであるが、この歌、君王が日中の遊びを嫌い、夜宴を楽しまんと、月に照らされた御殿に赴くと、人々の心は結ばれ、痛み憂える気持を晴らすべなく、ただ月に向かって歌ったというそれである。従って、ここに言う「美人」は、『楚辭』に於て特徴的に見られる如く、君王に喩えらるゝべきものであらう。そして『楚辭』に於てそうである如く、「美人」と人との間には、男女の恋情をも汲み取ることができる。表の意によつて「美人」を女性とし、「人」を男性とする、或は裏の意によつて「美人」を男性とし、「人」を女性とする、そのいずれによろうと、この歌が所謂「思婦」の詩の風格を備えるも

のであることは疑うべくもない。またこの「月」、「千里を隔てて明月を共にす。」と歌えば、明かに「共にする月」ではあるが、必ずしも、このことを以て、「思婦」と「月」とを結びつける本質的、普遍的要因とするわけにゆかないこと、前述の通りである。ここは、女性が月を見て男性を思うというパターンに注目するにとどめ、今しばらく、唐以前の詩で、「思婦」の情と「月」との関連の見られる詩について、その実態をうかがうことにしよう。

## 二

雁南征兮欲寄边声

雁南に征けば边声を寄せんと欲し

雁北帰兮為得漢音

雁北に帰れば漢音を得んと為す

雁飛高兮遡難尋

雁飛ぶこと高くして遡として尋ね

難く

空断腸兮思惓惓

空しく腸を断ちて思ひ惓惓たり

攢眉向月兮撫雅琴

眉を攢め月に向ひて雅琴を撫すれ

ば

五拍冷冷意弥深

五拍冷冷として意<sup>いよいよ</sup>弥々深し

〔樂府詩集〕卷五十九

後漢の蔡琰の作と伝える「胡歌十八拍」の第五拍で、胡地に在る婦（蔡琰）が、故国漢土に帰りたいくも帰れないこ

とを憂い、月を見つつ愁眉を集めるさまを歌う。この婦、言うまでもなく所謂「思婦」であり、そしてここでは、その「思婦」にとり、「月に向う」ことが恰も必然の如く歌われ、「思婦」と「月」との緊密な関係をうかがわせる。この「月」に、遠く漢土をも照らす月、即ち「共にする月」の性格をおびさせるのは、やはり取り過ぎというものであろう。

明月何皎皎

明月何ぞ皎皎たる

照我羅牀幃

我が羅の牀幃を照らす

憂愁不能寐

憂愁して寐ぬる能はず

攢衣起徘徊

衣を攢りて起ちて徘徊す

客行雖云樂

客行樂しと云ふと雖も

不如早旋帛

早く旋帛するに如かず

出戸独彷徨

戸を出でて独り彷徨し

愁思当告誰

愁思当に誰にか告ぐべき

引領還入房

領を引きて還りて房に入れば

淚下沾裳衣

涙下りて裳衣を沾す

〔文選〕卷二十九

「古詩十九首」第十九。明月の夜、旅に在る夫を思い、憂愁憂思する。「明月何皎皎、照我羅牀幃。」の二句は、次の「憂愁不能寐」を引き起し、以下の「思婦」の情をイメー

ジするものとして在る。恰も『詩経』の詩に於ける「興」<sup>(3)</sup>の表現法の如くである。『楽府詩集』四十四所収の「子夜歌」四十二首は、そのいずれもが「思婦」の詩と見なすことができるが、その第三十三首に「夜長くして眠るを得ず、明月何ぞ灼灼たる。」とあるは、「古詩十九首」のそれと略々同じ表現で、同性質の表現と見なすべきものである。

魏の文帝曹丕の「燕歌行」(『文選』卷二十七)は、曹丕が、旅に在る夫を思う妻(思婦)に代って憂愁の情を歌ったものであるが、旅中の夫を思い、空閨をかこつ情を切々と歌いあげ、次のように一篇を終結する。

明月皎皎照我牀 明月皎皎として我が牀を照らし  
星漢西流夜未央 星漢西に流れて夜未だ央きず  
牽牛織女遙相望 牽牛織女遙かに相望む  
爾獨何辜限河梁 爾独り何の辜ありてか河梁に限らる

「星漢西流夜未央」の句は、意味上、以下の二句に連絡するが、「明月皎皎照我牀」は次句に続くかに見えて、実は文意上孤立し、しかもその前文を承けるに、その表現はいかにも唐突である。この句、恐らく前掲の「古詩十九首」の詩の冒頭の二句を踏まえるであろうが、「古詩十九首」の例に於て既にそうであるように、「思婦」の情をイメー

ジする、言わば定型化された常套句として挿入されたものであろう。いずれにしても象徴性に富む表現である。こうした表現は、その後、多少の変化を加えつつ、特に所謂「思婦」の詩に於て顯著に見られるものである。宋鮑令暉の作「代葛沙門妻郭小玉詩」其の一を挙げておこう。

明月何皎皎 明月何ぞ皎皎たる  
垂幌照羅茵 垂幌羅茵を照らす  
若共相思夜 相思の夜を共にするが若く  
知同憂怨晨 憂怨の晨を共にするを知る

(『玉台新詠集』卷四)

このほか、同じく「思婦」の情をイメージするものとして、「明月照高樓」の句がある。

明月照高樓 明月高樓を照らし  
流行正徘徊 流行正に徘徊す  
上有愁思婦 上に愁思の婦有り  
悲歎有余哀 悲歎して余哀有り

〈略〉

(魏曹植「七哀詩」(『文選』卷二十三))

この詩、長い間夫と離別し、空閨を守る妻の悲哀と夫への怨みを歌う、典型的な「思婦」の詩であるが、この冒頭

の二句は、やはり「思婦」の情をイメージする象徴的表現であり、そのイメージによって更に次の二句を引き起す役割を果たしている。そしてこの句もまた、言わば常套句として他の詩にも用いられる。

晨風鳴北林 晨風北林に鳴き

熠燿東南飛 熠燿東南に飛ぶ

願言所相思 願はくは相思ふ所に言へ

日暮不垂帷 日暮るるも帷を垂れずと

明月照高樓 明月高樓を照らし

想見余光輝 想見す余光の輝

玄鳥夜過庭 玄鳥夜庭に過り

勞薪能復飛 勞薪として能く復た飛ぶ

褰裳路踟躕 裳を褰げて路に踟躕し

彷徨不能歸 彷徨して帰る能はず

浮雲日千里 浮雲日に千里

安知我心悲 安んぞ我が心の悲しみを知らんや

思得瓊樹枝 思ふ瓊樹の枝を得て

以解長渴飢 以て長き渴飢を解かんことを

この詩、『芸文類聚』卷二十九に、「漢の李陵、蘇武に贈る別れの詩」として収める。鈴木修次氏は、この詩を含む蘇武・李陵の作と伝えられる離別の詩は、後人がその名の

下に、離別をテーマとして習作したものと想定された。『漢魏詩の研究』第二章、第四項、四伝蘇武・李陵詩考）それはともかくとして、本文について言えば、一篇を通して受ける印象や用語によって見れば、少なくとも表面的には「思婦」の詩の性格をおびる詩と思われる。或は「思婦」の詩の発想によりつつ離別の情を歌うと言ってもよいであろうか。

「晨風鳴北林」は、明かに『詩経』秦風、晨風の「猷たる彼の晨風、鬱たる彼の北林。」を踏まえるものである。

そしてこの篇については、婦人が夫の不在を歎く詩との解（朱熹『詩経集伝』）がある。「褰裳」は、恐らく『詩経』鄭風、褰裳の「子惠して我を思はば、裳を褰げて湊を渉らん。」を念頭に置くであろう。「褰裳」の詩は、女の男を思う詩である。「思得瓊樹枝、以解長渴飢。」も、恐らく『詩経』周南、汝墳の「彼の汝墳に遘ひて其の条枝を伐る。未だ君子を見ざれば、怒として調飢の如し。」を踏まえるものである。この「汝墳」の詩も、妻が夫を思い、その帰りを待つ詩である。尚、晋陸機の「思婦」の詩「為顧彦先贈婦詩」其の二（『文選』卷二十四）には、「願はくは金石の軀を保ち、妾が長き飢渴を慰めん。」とある。以上、用語の上から本篇を「思婦」の詩の性格を有するものと理解

する所以である。

ところで、この詩の第五、六句「明月照高樓、想見余光輝。」は、明かにその前後との意味上の連結が見られない。そしてその前句は、前掲の曹植の「七哀詩」に於ける初句と同じである。従って、この二句もやはり、「思婦」の情をイメージする象徴表現と見なすべきものであらう。ただこの兩句、以て次句を引き起す作用をしないということに於て「七哀詩」のそれに異なる。

以上、唐以前の「思婦」の詩に於て、「月」がいかなる形で詠み込まれ、その表現がいかなる性格、形態を有するかについて窺ってきたが、「思婦」の詩に於て「月」を歌う句のいずれもが、「思婦」の情をイメージする、言わば象徴的表現であり、またその多くが、「思婦」の憂い、悲哀等の心情を叙述する句を引き起す。言わば「詩経」の詩に於ける「興」の如き性格を有するものであることが看取されるのである。尚、かかる表現に見られる「月」は、もとより「共にする月」ではない。

ところで、こうした表現は必ずしも「思婦」の詩に限らず、男が美人を思う詩（晉張華「情詩」其の二）や夫が亡き妻を思う詩（晉潘岳「悼亡詩」其の二）などにも見える。しかし、こうした例は「思婦」の詩に較べれば極めて少な

く、やはり「思婦」の詩に於て顕著なものと言うことができる。一体、「思婦」の詩と言うも、その多くは男性の手になるもので、「思婦」の詩でなくとも、男性が自らの思いを述べるに、部分的に、或は隱微に「思婦」の詩の表現手法を用いることはあり得ることで、「思婦」の詩であるか否か、「思婦」の詩の表現法であるか否か、必ずしも厳密には峻別できない所がある。

ここで、「思婦」或は「思婦」の情と「月」との結びつきの必然的要因は何か、これについて考えてみよう。そのためには、何より「月」に対する觀念を探る必要がある。

### 三

『詩経』に於て「月」を詠する詩は少ないが、その中で注目すべきは陳風「月出」の詩である。

月出皎兮 月出でて皎たり

佼人僚兮 佼人僚たり

舒窈糾兮 舒にして窈糾たり

勞心悄兮 勞心悄たり

月出皓兮 月出でて皓たり

佼人憫兮 佼人憫たり

舒憂受兮 舒にして憂受たり

勞心慙兮 勞心慙たり (第二章)

月出照兮 月出でて照たり

皎人燎兮 皎人燎たり

舒天紹兮 舒にして天紹たり

勞心慘兮 勞心慘たり (第三章)

毎章の初句を、毛伝・鄭玄・朱熹ともに「興」とし、鄭玄は、「興するは、婦人、美色の白皙有るに喩ふ。」と注し、三章とも、「皎人」即ち美女を思慕するも会うを得ず、心憂えるさまを表わす、ととる。朱熹は、「此も亦た男女相悦びて相念ふの詞なり。言ふところは、月出づれば則ち皎然たり。皎人則ち僚然たり。安んぞ之を見て竊糾の情を舒ぶるを得んや。是を以て之が為に心を勞して悄然たるなり。」と言ひ、男女相思慕するの詩としつつ、結局は、下二句を、男が美女を思慕し憂える意にとる。美女の男に対する思慕憂悶の情は言外に含まれると見るのであろうか。もし然らば、初句の「月」を歌うは「思婦」の詩の発想に通ずることになるが、未だこの解あるを知らない。いずれにしても、「月」と女性とが緊密な関係に在ることだけは確かである。次に邶風「日月」の詩について見てみよう。

日居月諸 日や月や

東方自出 東方より出づ

父兮母兮 父や母や

畜我不卒 我を畜ひて卒へず

胡能有定 胡ぞ能く定まる有らんや

報我不述 我に報ゆるに述ならず

(第四章)

妻が、自分を見捨てて顧みない夫を怨み、良偶を選んでくれなかった父母を怨んでみたりするのであるが、この「父兮母兮」は、明かに「日居月諸」に呼応し、「東方自出」、即ち、日月が常に決つて東方より出て、遍く下土を照らすに比して、「畜我不卒」、即ち父母は自分を最後までよく撫養しなかった、と承ける。朱熹は初二句を「賦」、即ち直叙法とし、「日」「月」を「父」「母」に係けないが、ここは、「日」と「父」、「月」と「母」と係けることによって次の二句を引き起す、所謂「興」の表現法ととるが自然である。前三章の初二句についても同様のことが言えるのであるが、鄭玄が第一章初二句に注して、「日月は国君と夫人とに喩ふるなり。」と言ふも、かかる理解を示したものである。尚、各章の初二句は、以下の句と意味上逆接の関係に在れば、言わば「反興」ということになる。

次の例は『詩経』の詩に遙かに遅れるが、やはり、「日月」と「男女」、或は「夫妻」との密接な関係がうかがえ、



しかもより明確である。

大義同膠漆 大義膠漆に同じ

匪石心不移 石に匪ざれば心移らず

人誰不慮終 人誰か終りを慮らざらん

日月有合離 日月も合離有り

(後漢の賈充とその妻李夫人との連句詩『玉台新

詠集』卷十)

妙哉英媛德 妙なるかな英媛の徳

宜配侯与王 宜しく侯と王とに配すべし

靈応万世合 靈応は万世に合し

日月時相望 日月時に相望む

媒氏陳東帛 媒氏東帛を陳ね

羔雁鳴前堂 羔雁こうがん前堂に鳴く

(晉傅玄「有女篇」二十一～二十六句『玉台新詠

集』卷二)

前詩に於ては、夫賈充が妻に対する操の堅固なるを述ぶるに對し、妻李夫人が、先々の夫の変心を懸念して、「日月も合ったり離れたりするもの」と言い、後詩に於ては、「日月」の時を得て相望むが如く、男女の良縁を得て婚儀に臨むことを言う。そして、いずれも夫婦を「日月」になぞらえる。

謝莊の「月賦」には、「素娥を后庭に集む」と言い、その李善注には『淮南子』を引く。「素娥」、即ち「嫦娥」或は「姮娥」の話は、『淮南子』覽冥訓に見える。

羿げん、不死の薬を西王母に請ふ。姮娥、窃ちやくみて以て月に奔る。

そして、高誘はこれに注して、「姮娥は羿の妻なり。羿、不死の薬を西王母に請ふ。未だ之を服するに及ばざるに、姮娥盗み、之を食して仙たるを得、奔りて月中に入りて月の精と為る。」と言う。また羿については、弓の名人にして、堯の時、十個の日が並び出て旱魃をもたらしたので、堯の命を承けてこれを射、うち九個を射落したと伝える。(事は『淮南子』本經訓、及びその高誘注に見ゆ。)この話、及び羿が月の精となれる姮娥の夫であることを合わせ考えると、羿は日の精と見なすべく、従って、ここにも「日」と「夫」(羿)、「月」と「婦」(姮娥)という構図が成り立つ。

かかる例に見る如き「日」と「夫」「父」「月」と「婦」「母」とをそれぞれ結びつける要因は、言うまでもなく陰陽の觀念に外ならない。

『礼記』礼器に、「君は阼たに在り、夫人は房に在り。大明は東に生じ、月は西に生ず。此れ陰陽の分、夫婦の位な

り。」とあり、「夫」「婦」をそれぞれ陽と陰とに配する。また『淮南子』天文訓に、「日は陽の主なり。へ略月は陰の宗なり。」と言ひ、『呂氏春秋』卷九、季秋紀、精通に、「月は群陰の本なり。」と言う如く、陽の主たる「日」に対して、陰の主たる「月」との觀念がもとと在る。従つて、陰陽の觀念に於ては、「日」が「夫」の主なるに對して、「月」は「婦」の主ということになり、その意味に於て、「日」「月」は「夫」「婦」の言わば象徴的存在と言うことができる。さきの羿とその妻嫦娥との話も、もとより、かかる陰陽觀がその下地となつてゐるのである。<sup>(3)</sup>

「思婦」の詩の盛行するその最中に位置する謝莊の「月賦」。そこには、「日は陽を以て徳あり、月は陰を以て靈あり。」と、「日」の陽なるに對して、「月」の陰なるを説く、これ即ち、「思婦」の詩に於ける「月」が陰陽觀と決して無縁でないことを暗示してゐないであらうか。

「思婦」の詩に於て、作者は多く「日」に及ばない。しかし、筆者は、以上見て来た如く、「月」を陰の主と見、「群陰」の一たる「婦」の主であるとの觀念が本来存し、それが、「思婦」と「月」とを結びつけたそもその要因であらうと考えるのである。「月」の精「嫦娥」(嫦娥・素娥とも)の伝説との関連も関心の持たれるところではある

が、「思婦」の詩に於てこれを歌う例は寧ろ僅かであり、「明月を共にする」の発想とともに、これがそのそもその要因であるとは到底見なし難く、寧ろ後次的なものと考へるべきものであらう。

#### 四

ところで、「月」を「魄」を以て呼ぶ例が在る。

皎若明魄之升崖。(皎として明魄の崖に升るが若し。)

(班婕妤「擣素賦」《古文苑》卷三)

月羽皎素魄。(月羽素魄皎かなり。)(宋武帝「北伐詩」

《芸文類聚》卷五十九)

円魄当虚闔、清光流思筵。(円魄虚闔に当り、清光思

筵に流る。)(梁武帝「擬明月照高楼」《玉台新詠集》

卷七)

上弦如半璧、初魄似蛾眉。(上弦半璧の如く、初魄蛾

眉に似たり。)(北周王褒「詠月贈人詩」《芸文類聚》

卷二)

この「魄」、言うまでもなく、陽に属する「魂」に對して、陰に属する「魄」である。『説文解字』九上には、「魄」について「陰神なり。」と解し、『周易參同契』中篇にも、「陽神日魂、陰神月魄、魄と魂と互ひに宅室と為る。」とあ

る。これらの例は、「日月」に、それぞれ「魂魄」に通ずる属性の存在を認めるものであろう。然らば、「月」を「婦」の象徴とするも、このことにより、更に、「月」が言わば「婦」の精、或は「魄」（たましい）としての性格を有する存在であつたとも言えよう。このことは、『礼記』礼運に、「君と夫人と交々猷じ、以て魂魄を嘉しましむ。是を合莫と謂ふ。」とあるによつてもうかがえるようである。

新裂芥紉素 新たに芥の紉素を裂けば

皎潔如霜雪 皎潔にして霜雪の如し

裁為合歡扇 裁ちて合歡の扇と為せば

团团似明月 团团として明月に似たり

出入君懷袖 君が懷袖に出入し

動搖微風發 動搖して微風発す

常恐秋節至 常に恐る秋節の至りて

涼風奪炎熱 涼風炎熱を奪ひ

弃捐篋笥中 篋笥の中に弃捐せられ

恩情中道絶 恩情中道に絶えんことを

（『文選』卷二十七）

この詩、成帝の寵愛を趙飛燕姉妹に奪われた班婕妤が、己が身の不遇を悲しんで作つたと伝えられる「怨歌行」と題する詩である。（『玉台新詠集』卷一には「怨詩」と題し

て収める。尚、作者については尚議論が存する。）

君の懷に風を送る扇、それは恰も「明月」の如き円扇（丸うちわ）。しかし、この「明月」、前句の「合歡扇」（表と裏から貼り合わせて作つた扇）が夫婦和合の象徴としてのそれであることを参しても、扇の形のみを意味するものでなく、「思婦」の象徴としての「明月」でもある。そしてそれは、「思婦」の「精」、即ち「魄」（たましい）をも示すものであろう。鮑照の「代淮南王二首」其の二（『玉台新詠集』卷九）の一節、

願逐明月入君懷 願はくは明月を逐ひて君が懷に入ら

ん

入君懷結君珮 君が懷に入りて君が珮を結ばん

怨君恨君恃君愛 君を怨み君を恨み君が愛を恃む

ここに言う「明月」にも同様の意味が読み取れないであらうか。

## 結び

所謂「思婦」の詩に於て特徴的に見られる「月」を詠ずる表現。その表現の在り方の特徴は象徴性に富むことに在り、その本文に於ける性格は、以て「思婦」の情をイメージし、或はそのイメージによつて「思婦」の情の叙述を引

き起す、言わば『詩経』の詩に於ける「興」に通ずる所がある。そして、こうした表現上の特徴、性格は、本来、「思婦」或は「思婦」の情と「月」との本質的な関係から来るもので、「陰」の主たる「月」と、所謂「群陰」の一たる「婦」という陰陽観に根ざすものであると考える。「婦」に於ける「月」は、その意味で象徴的存在であり、また、その「精」即ち「魄」(たましい)とも見なすべき存在で、「婦」の詩、或は「婦」の立場に立つ詩の中心をなす「思婦」の詩にそれが象徴的に歌い出されたものと思われる。「思婦」の詩には、所謂「月を共にする」の発想も見られるが、その例少なく、これを以て「思婦」の詩と「月」とを結ぶそもその要因とすることは難しく、それは寧ろ、言わば後次的、副次的なものと考えるべきものであらうと思われる。

### 注

(1) 「物思いに沈む婦人」、或は「(夫を思い)空闊をかこつ婦人」の意として用いる。「東南有思婦、長歎充幽闥。」(陸機「為顧彦先贈婦詩」)「善曰、曹子建七哀詩曰、上有愁思婦、悲歎有余哀。」(『六臣註文選』卷二十四)

(2) 李善はこの歌の「美人」について、『楚辭』九歌、少司命の「望美人兮未來」(美人を望めども未來来らず)の句を以て

例示し、張銑は、「美人は君子に喩ふるなり。」と注す。「美人」の用例は『楚辭』に於て顯著であり、また、この歌の口吻から、『楚辭』に於けるそれが意識されているものの如くである。「離騷」「九歌」(少司命)「九章」(抽思・思美人)に於ける「美人」、古注は略々君王をさすと見る。「美人」の第一義は、『詩経』邶風、簡兮の「西方美人」「彼美人」が男性である如く、必ずしも「美女」の意とは限らないが、朱熹が「離騷」の「美人」について、「美人とは美好の婦人を謂ふ。蓋し託詞して意を君に寄するなり。」(『楚辭集注』卷一)と注する如く、「美女」の意とするが一般である。

(3) 『詩経』の所謂「六義」のうち、「比」「興」の義については古来必ずしも定説を見ないが、ここでは、『周礼』大師の鄭玄の注に引く鄭司農の説、「比とは、物に比方するなり。興とは、物に託事するなり。」及び朱熹の「比とは、彼物を以て此物に比するなり。」「興とは、先づ他物を言ひて、以て詠する所の詞を引き起すなり。」(『詩経集伝』)の定義に従うこととする。

(4) 高田真治氏は、「集伝は賦とす、これは比と見てよい(師説)であらう。日月の照臨を以て、莊公が己を顧みないことを反比したのである。」(『詩経』(集英社、漢詩大系))と説かれる。姚際恒は「興にして比なり。」(『詩経通論』卷三)と説く。

(5) 小南一郎氏は「陰陽」に関して、この羿と姮娥の話を引きつつ、陰陽の結合は新しい生命力を生み出す、即ち再生を意味し、再生を生み出す陰と陽との結合は、最も端的に男女の性的

結合によって象徴される旨のことを説かれる。『中国の神話と物語』第一章五、陰陽の交会―天地構造との対応（岩波書店刊）

（駒場東邦高校）